水上勉全集

10

水上勉全集　第十巻

昭和五十一年十二月一日印刷
昭和五十一年十二月二十日発行

著者　水上勉
発行者　高梨茂
印刷者　白井倉之助
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
電話(五六一)五九二一
振替東京二―三四
検印廃止
©一九七六

目次

凍てる庭　3
こおろぎの壺　489
あとがき　505

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

凍てる庭

誕生

一

その子が生れたら、男の子なら蕗助、女の子ならば蕗代にしよう、と私は考えていた。蕗が好きだったし、当時妻は蕗や芋のつる葉ばかり喰っていたのだから、たしかに、生れ出るその子は蕗の子のような気がしていた。当時、私たちはどん底にあった。若狭の山の上の分教場で代用教員をしていた私の給料は三十八円。それしか収入がなかった。田舎だから主食の欠配はなかったが、惣菜や生魚がべら棒に値上りしていて、鯖一匹五円、南瓜一箇七円という闇相場にはとてもついてゆけなかった。だから、妻は朝から山へ入り、蕗をとったり、庭先の芋畑のつるを千切ったりして米にまぜ、雑炊やスイトンにして常食とした。生れる子は、栄養失調の、ひ弱い子にちがいないと思われもして、「蕗代」という命名には、いろいろな、願いもこめられてあった。蕗は地殻を割って春先にいち早く花を咲かせ、一本のくきに大きな葉を支えて生長してくる。地べたに根を張る力は強い。陽蔭でも、どこでも、繁殖する。そのような強い子になってもらいたかった。そうして、あの蕗の薹のように、清潔で、素朴で、つましい花にもなってほしかった。

「あたしは、鮎子の方がいいと思うのよ……男の子だったら、鮎夫だっていいじゃないの。なん

だか、蕗っていう字なじめないわ」
と里子はいった。
「蕗の字がイヤかね」
と私は反問した。字ヅラが気にいらないという。草カンムリに路と書くこの字はすわりもいい。幸子や洋子や千代子などはありふれている。同名の人も少ないはずだ。正直いって鮎子も鮎夫もわるい名とは思わなかったが、どうせ、つけるなら、蕗代あるいは蕗助だと私は思った。
「フキスケだなんて……変な名よ」
「きみが変な名に思うだけだ。ぼくは立派な名だと思う」
と私はいった。里子は蕗という字が立派であることを最後まで理解できなかった。
「ま、生れてみなけりゃわかんないでしょ。男の子だか、女の子だか……それに、健康な子がうまれるかどうかもわかんない、……淳子(じゅんこ)みたいなことになったら大変でしょ」
と里子はいった。一年前の冬に、疎開地の若狭で、里子は、早死した女の子をひとり産んでいた。その子のことをいったのだった。村から五里ほどはなれた小浜町の病院で出産したが、その子は目方もかるく、十五日目に死んでいた。十日目に名前をつけなければならなかったので、本校の同僚たちのすすめもあって、淳子と命名し、病院へかけつけたが、子は里子の逆(ほとば)り出る乳首に吸いつく力もなく、それから五日目に死んでいた。その出産時にも、私と里子には辛い思い出があった。二月はじめだったので、若狭は大雪で、病室の窓を被うように雪がつもり、火の気のない病室は、冷蔵庫のように冷えた。分娩室から押し車でもどってきた里子は、個室のベッドに寝て、

しきりに子供のことを気にした。発育不全でガラス箱に入れられている子をみてきた私は、安心させるため、嘘をいい、元気な子だよ、といった。里子はほっとした様子で寝入ったが、それから十五日間、ガラス箱の子と妻との間を私は右往左往しなければならなかった。結局、子は死んだ。

里子は、子の死を知って、頬ぺたに涙の筋をいくつもつたわらせて泣いた。泣きながら、死んだ子をみせてくれ、と里子はいった。私は、村から一しょにきていた父とふたりで、死児を産着に包んで個室へもってきた。里子は半身をおこして、死児の紫色にちぢかんだ小さな顔を何どもなでていたが、やがて激しい泣き声をたててつっ伏した。里子はそれから病院にまだ二週間もいなければならなかった。起きたり歩いたりすると、貧血を起した。医者は栄養失調が原因だといった。私は死児の埋葬を終え、病院につききりで、村の分教場へ通った。つまり、昼は教員をやりながら、夜は看護役をした。月給三十八円では付添婦も雇えなかったからである。一ばん困ったのは、里子の出血が止まらないことだった。目方のかるい子を産んだというのに、どういうわけか、里子の膣口は裂けていた。医者にきくと、頭の大きな子だったので、分娩時に切開したという。その箇所は縫合されていたにかかわらず、血がおびただしく出た。私は、里子が小用を訴えると、便器をあてがい、それを捨てたあと、足をひろげている前で、硼酸水につけた脱脂綿を割箸でつまみ、出血箇所を何どもふきとった。洗滌を終ると、裂けた膣口へホルム酸をふりかけておき、その上へガーゼをはさんだ。当時、わずかしか綿花の配給がなかったので、私は、妻の股をあわせておくと、大急ぎで、血のついた脱脂綿を洗うのであった。不思議なことに、水洗い

をすると脱脂綿は純白になった。これを固くしぼって、病室の窓に干した。どの病室の窓にも、脱脂綿は干されていた。どの産婦も、一ど使用した脱脂綿をそのように洗い直して使っているのであった。

「こんなにまでしていただいて、子は死んだのね……なんにもならなかったわね」

と里子は、小用のたびにいった。

「もう二どと、あたし、こんなつらい思いするのはイヤ」

里子がどんな気持になっているか私にもわかった。戦争はすでに敗戦色が濃くなっていて、私にもいつ召集がくるかしれなかったのに「産めよ殖やせよ」の時代だった。子を産むことを政府は奨励していた。しかし、食糧の特配がちょっぴりあるだけで出産時の綿花の配給さえ充分でない状態である。里子はこりたというのだ。それに二週間も止まらなかった出血で、すっかり痩せ細り、死んだ子に親の生気を吸いとられたような顔をしていた。

里子でなくても、その二の舞を踏まねばならないのではないかと、私も思わざるを得なかった。だが、私は「馬鹿なことをいうもンじゃない……」といった。「こんどの子は大丈夫だよ。きっと丈夫な子だよ。この前の経験もあるしね。今から綿花やガーゼの用意をしておけばいいんだ……、あの時は、きみも初産だったしね」

里子は三ヵ月目の下腹を指先でつつきつつ、

「不思議ねえ、すぐ出来ちゃったんだから」

といって力なく笑うのだった。妊娠を心から喜んでいない顔を露骨にだしていた。その顔を私は

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

暗い気分でみた。じっさい、私もこんなに早く妻が妊娠するとは思っていなかったし、死んだ子の紫色に縮んだ小さな顔を思いだすと、恐ろしい気もした。今日の時代なら、母体の健康を気づかう意味からも、生活苦を理由にしてでも、かんたんに掻爬は出来たのだけれど、当時は、そうはゆかなかった。まだ日本は敗けていなかった。子供は育てねばならない。それが国からの至上命令だった。ところがそれから一ヵ月して八月十五日に急に終戦になった。天皇の詔勅が降り、きびしかった燈火管制も解けて、世の中が平和になった、というのに、私たちは、戦争中の子を産まねばならない義務を背負わされていたのである。

「とにかく……東京へ出ましょうよ。働く口だってあるでしょうし、……お産をするにも、東京の病院の方がいいわ、叔母さんも神田にいることだし……あたし、すぐにでも東京へゆきたいわ」

と里子はいいだしたが、私は、決心がつきかねた。新聞によると、東京は飢餓状態がつづいているそうだった。都の大半は焼けてしまっているし、住宅難と食糧難は深刻だ。そのため、転入禁止令も出るという噂があった。里子が淳子のこともあって次の子の安産を願う気持から、東京へ出たいという気持もわからないではないが、慎重に考えないと、また、若狭へもどってこなければならないハメになるかもしれなかった。

若狭は私の生家であった。私たちは、父母と同居はしていなかったが、わずかに生家と離れた畑の中の木小舎を改造した六畳ひと間に住んでいた。その生活は辛かった。家はもと木小舎だったので、便所がなく、隣家の安右衛門という農家の便所を借りにいったり、風呂もないので貰い

風呂をしている状態だった。里子が、このような、不自由な疎開生活から脱出したいとあせるのも無理はなかった。私も、出られるものなら東京へ出たかった。で、私は、九月はじめに、校長に休暇願を出し、東京の事情を探索に出かけたのだった。疎開前につとめていた有楽町の電気新聞へゆき、友人たちをたずね、記者生活にもどれるかどうかを打診すると共に、里子の叔母の嫁ぎ先である神田の下田家を訪ねて、東京へきても里子の出産が田舎よりも安心して出来るか、さらに私の仕事がみつかって、生活のメドがつくようなら、焼け残った叔母の家のひと間にでも置いて貰えるかどうかを訊ねにいったのだった。下田の叔母は、若狭にいて苦労をしている姪の事情は手紙でよく知っていて、

「そりゃ、不自由は不自由だしするけどさ、田舎にいるようなことはないわよ。日大病院だって、お父さんの知ってる人もいるし……あんたさえ、一生懸命働いてくれるんだったら、……お産のすむまで、置いてあげてもいいよ。そのかわり、あんたは、若狭へときどきお米をとりに帰って頂戴ね」

といった。下田家は焼け残った神田の真ん中ともいえる、省線の駅から歩いて五分ほどの、司町の一角で、封筒工場を経営していた。終戦になって、事業もかすかな活気を呈しはじめ、先行きも明るく、商売も順調であることが心強くもあったし、それならば叔母の言葉にあまえて、心機一転して、焼け跡の東京で働いてみるのもいいではないかと私には思えた。二日いて私は若狭へ帰った。そうして、すぐに、本校の校長に東京へ出たいからといって辞表を出した。辞表は即座にうけつけられた。十月十日付であった。私と里子が、山の上の分教場の二十二人の子らに別れ

て、若狭本郷の駅から東京へ帰るための汽車に乗ったのは十三日のことである。六ヵ月目の目立つ腹をかかえた妻は、健気にリュックに入れた米や麦を背負い、私も背中にリュック、両手に衣類などつめこんだ大きな風呂敷包みを下げて、満員の小浜線に乗った。若狭は、早や秋の音がしていた。海面を吹いてくる風は肌寒く、汽車が山あいを走る時は、色づいた楓の谷が扇面になって紅くひらけてみえたことをおぼえている。

「おばさんはね、君ちゃんよりも、あたしが好きだったのよ……叔父さんも、昔からあたしびいきだったわ」

と里子はいった。君子というのは、里子の姉で満州にいた。その姉の嫁ぎ先へ、里子の父母たちは、伊勢松阪の家をひき払って、渡満していた。父母たちの消息も、いまは全然わかっていなかった。新聞でみると、満州は生地獄を呈しているとのことだった。

「叔母さんは、お父さんたちが満州へゆくのは、反対だったのよ。それなのに、君ちゃん、子供がうまれたもんだから、お守り役に父さん母さんよび入れたかったのよ。叔母さんは、母が姉さんだしするしね、そりゃ松阪のお爺ちゃん、お婆ちゃんをみてほしかったのよ、ところが君ちゃんのひと声で、お父さんたち、爺ちゃん婆ちゃん放ったらかして、行っちまったでしょ。だから、叔母さん、松阪の爺ちゃんたちの世話もしなけりゃなんなかったから、頭にきてるのよ……その点、あたしが、あんたと結婚して、日本に残っていたんで……嬉しかったのね、こんどのことだって、二つ返事でひきうけてくれたのも……あたしが満州へゆかずに、あなたと一しょにいたのが嬉しかったからよ。仲人でしょ。あたしたちを幸福にして、君ちゃんたち見かえしてやりたい

んでしょ。きっと」

里子はそんなことをいった。私は、里子が、満州で消息さえ知れなくなった父母や姉のことを、そんなふうにいうのが不思議だった。じつは、代用教員の口をみつけて、若狭へ疎開しようといい出した時に、里子は、満州ゆきを私にすすめていた。当時といっても、終戦の二年前だが、その頃は満州の方が収入も多く、戦争が長びけば、内地にいるよりは、生活がラクだという見解がつよかった。大連にいる父母たちからも、しつこく私たち夫婦の渡満をすすめてきていた。私は、五年前に、一ど満州にいたことがあり、肺病になって帰っている経験もあったし、埃っぽくて、樹木のない大連の町の冬の生活に怖気をおぼえていたから、あくまで若狭で暮すことを里子にすすめた。

「父さんや母さんも大変だろうしね。君ちゃんだって、乳呑み児をかかえてさ……大連でどうしているか……苦労をしているにちがいないよ。いまから思うと、ぼくらはゆかなくってよかったんだ……君ちゃんには子は何人いるのか」

「二人よ……」

と里子はいった。二人の子をつれて、どこをにげ迷っているのか。ソ連兵の侵入で八月の満州は地獄図が展開されたと新聞は報じている。

「たいへんだろう。しかし、生きておれば、やがて、みんな戻ってくる……そしたら、ぼくたち、内地にいた者が迎えてあげなくちゃならない……」

と私はいった。

「そりゃ、帰ってくれば、あの人たち松阪に落ちつきますよ。お爺ちゃんたちの家があるんだもン」

と里子はいった。その里子の祖父と祖母は、さる素封家の家系にうまれた白痴の子を養育することによって、松阪一のその素封家からわずかな手当をもらい、細々と生活しているということだった。そんな祖父母を捨てて渡満していった里子の父母たちは、いってみれば、松阪へ帰ることも不本意であったろう。

「万が一、引揚船に乗れて、舞鶴なんかについた場合、若狭が近いから、来るかもしれないね」

と私がいうと、里子は、

「来るもんですか、お父さんは意地っぱりだから」

といった。私は一年前に渡満をすすめにきた里子の母の満枝が村にきてイヤに満語をぺらぺらとつかって満州の自慢をした顔を思いだした。

「東京へだって来る元気はないわ。だって、あの人たち、叔母と仲がわるいんだもン。……叔母は……うちの家系じゃ、あたしだけが好きなのよ……」

里子は自信たっぷりにいうのだった。その叔母は東京で結婚式をあげた私たち夫婦の仲人もしてくれ、電気新聞の記者をしていた当時の私の中野区新井町のアパートへも時々顔をみせていた。里子に似て、眼尻の心もちつりあがった松阪系の特徴のある顔を、にっこりさせ、

「新婚生活っていいもンね」

などと私たちをからかった顔を思いだす。その叔母が東京にいるおかげで、私たちはいま東京へ

還ってゆけるのだった。
「おれは、電気新聞にもどって、とにかく働いてみるよ。……そうして、出直しするんだ」
と私は、列車の隅にリュックを置き、身重の里子を満員の客からかばうようにすわらせて向きあっていた。
「歴史的な日だな。われらの時代への出発だ。……東京は復興に向っている……焼け跡にバラックがたち、大勢の疎開者が……どんどん帰ってゆく……やっぱし、焼け野が原になっていても東京がいちばんいいな……叔母さんたちの家が焼けのこってたことは、ぼくたちの幸運だ」
「ほんとだわ」
と里子はつりあがった眼をにっこりさせ、
「叔母さんたち、火たたきであの家を守ったのね。あたしたち臆病者で、空襲がこわくて若狭へ逃げたけど……。あの人たち、最後まで東京を守ったのね」
といった。小浜線は敦賀が終着駅だった。その敦賀で米原ゆきに乗りかえて、一時間後に米原につき、十番ホームから東京ゆきに乗った。東海道線の列車はひどかった。窓ガラスは割れ、座席のシートも裂け、貨物車のような車輛に、すし詰めの復員者と乗客がつまっていた。妻と私は気丈にそれらの群集をかき分けて車内に入りこみ、妊娠六カ月の軀をようやくのことで車内の座席に休めることが出来た。
昭和二十年十月十四日の早朝だった。私が二十六歳、里子が二十四歳。子はまだ腹の中にいた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo